ならひ

911.3
ナ

尚齒會はもろこしの事にてありしか
し香山居士のいへるは昔の詩にもま
はかなくみつけて六まつのまいらする人
乃世に四十五十七十あまりの老者
非常なとこそいへ後来を見し
すみ給ふ人々はまた七十にも叔載同友
宴集の詩をも議しけるはこれにゆき
まちて以後かの詩は宴會の遊びにた

また此君の御徳に與ハさるゝ事不
少からぬ處めてゝ一條おり上りて
あるらしも草木の意ゝ作らんや
地やあまた君子の香る事、席を南山
史今あまた唐の賢者ハ今まで事
取しめ限りなくあまり給の根笑
をも學ひまいらせ其花ともの此詞
をまの言ひもいひ津書すを出代るを

をる學び史やうきを蝶様とし事
ヿ集まる名取川といふ世の中の
埋木のうき此まんこともしみある
名とり川の名まで高き人の業を計
あらはれなき名の高光を輝
かの埋もれ木の底のまをて一度あり
洞史ゝの誕生のいくとをて南の根当
書院のよて度まで思ひらんかはる

あらたまの新年まなひこの一くさ
を記し事端書て思ひ出に
もし豊めし其のときを知し也

明治廿八年二月

掃花庵八十翁

（印）春湖

還暦を賀しゝ寄

此先に幾萬年も祝哉　春湖

松枝の雪も無くなり和きま哉　甫山

飼つるゝ鶴に健福み明らん　萬笠

水たまりて所も積のけの雪　採むめ

月を待わまち思ふけれとも秋し　青宜

山のう調る雪の多み風　子蔵

流ことく綿の如し雛に旅寝の萬て　梅年

家并河ほとりて、菖蒲なき利　竹夫

長相識何處めに縄の家多あり　謝佳

花つゝしかはもまことにいふ　其仙

柏手打川と打ても響もせぬ　花好

衣のけ香節志らぬ榮する　乙雪

はや秋ては稲る文字の月照　精斎

二人して手を知て硯の猿まる　露垂

店飾り下駄ゝ傘傍榛ほしと　成雅

つまあきかゝり石を拾ひ　金羅

七日も之晴れ更たる花生壺　永機

乾してかゝり傳節寸様あみ　芳泉

当のあるけまに何を致しつ言　守山

ゆしなき中へ拡る妙　月彦

定宿でゆくなるあけ金高き　睡松

山門もともし出船入るね　晩泉

時鳥けふもこゝろの声ま玉ぬれ　富水

花とは兎の世わりの月もさ遠　文禮

涼しさや兎る影に暮くらぬ神祠曇　默孚

香ひ色のあてのしみ成も秋　巾雲

膝息み毛野酒偶の塗机　素水

浅さ刀鷹飾も知らて猿さぬ　永孚

満月といふに脂よ響れ晩　三雄

引はり合し鮭のさん物　太年

十方の田畑の出来にあれば實待　尋香

正月の北里よ念佛も無縁　素石

子福者の尚遊會よ九品けて　源棗

の花ふみ頭に歌語て如累　光石

見所といつもる花の八重咲一　等哉

各れ機嫌よ来れ謡よ　拙草

山球

春雨やおもて峠の杉あかる

山も霞まぬ雨の日暮れ

抽かし茶の文を贈す

憶よれ夜あけて幾多代言

何ゝ書ん今宵の夜は静けさ

昔夜の絵も明けし百千鳥

先ゝゝ嫁の錢取りけり新暦

芹舎

彝儀

松浮

梅荻

臨雪

禪山

さきさき幾歳十のくりや桜花　美芳

枝をはく霞ま鶴の雨も花なかに　積翠

咲とふり春くるる岩ぬ動磨　寿瓶

美之郷の津や齢も又長し　梅叢

形興し御人とともに初の春夷　文江

寿軽し此ぬ花さく千代の花の旅　路圃

光たる十春さ世皇都ぬ百千鳥　万年

萬業永かまれ松本後君ぬ春　柳圃

柳ぬらさ流しや千と勢の動に郭　九岳

めかりしと零ちる櫻や花流れ也ま　輝白

十日のの花や千とせは見えて　彦丸

宝ちらく常さ春ぬ果ら馬も花　卜扇

こゝ尤くりも代もつき了しも川の葉　柳亭

あら無みて限る花とつなも代の種　旭雀

葉みをもの井にくりや井出の里　めゝ山

みな席さかともそれは燐の舞嬢　犂典

京ゆかし花も出て来る木下闇　稲處
何となく人をまつ夜の梅の雨　崇山
なほ色もよき隠所や松の野　百可
大和
みよしの桜は雨か竹の露　水石
摂津
晴渡る花もしばしは雪交り　潮水
花月夜やしれる人の花の袖ぬらし　安人

鶯の啼されて花は花盛　流美
月も入あけの鐘や遠寺　似和
花よりも葉桜涼しき風のなれ　南路
朝日やにほひし須磨の朝顔咲　朝色
伊勢
夕つ晴れあとに見えてや川の上　十水
ちりそめし所の花や春の山　京志
いつまでも月見ゆるや野の露　果樵

四五軒も里になりけり木槿垣　蔵中

居後

志らつゆや葛軽くてそ秋の露　何光

鳴く聲や池のなかなる春の月　雄雨

うてなみ飛掃除男も帰り仕舞　車友

春なきと月和をなりけり住居哉　立意

青色やまだ河ゆく人の旅　素洞

しば仰向ける牡丹の花の力　静叟

家をとへいつかは松が暮の秋　二楓

何様に凄きもかけて土用干　清江

捨て置き羽ぬる戦くさの蓋の花　蒼虎

子やはや花を帰りて眼の梅橋　禾啓

畑の娘めぬ帰る女に雪かな　河洗

立よりも取の端めも花の春　松窓

むし帰るや胸おちて涼み合　穆鶴

雨の後きりし中より木がらしの聲　柏湖

峰にあつき浦の垣鄰　積翠

草履も〆て掃る紙燭火　寿雅

女房も得たか何めて別れけり　梅叢

辞り返す文朝顔の血眼　文江

汗拭て居る骨に風の涼しさ　柳窓

峰の入みしの夜の月　旭荘

手拭文て待舟見に八幡宮　柳園

葉もなけれは費えたる飯　万年

来る雨に来る初めぬ遠出かな　斎文

女郎みに出来て大の隣なる　卜窗

雲の後日の中日の西あき　柳浪

様さへ掃く嬉しさ　路園

下略

遠江

まつむさふ斗りな梅の下やどり　十湖

海山の海より明てさくら出　蕙畝

百なみにほのかなりけり霞の外　知碩

ぬかつかう遊ぶ人の影わりけり　玉壺

一村や雀のしらぬ青すゝき　木潤

夕やけや籠の中よりしら扇　可雄

稲妻や雪吹に新縄の意味　洋々

駿河

風わたる野のさく梅の一夜かな　露村

立ゆくやうらけ野ゝ河の村雨　竹兼

ありかゝる新樽の中に清見寺　蛸雪

明ぬのや霧に染りし蓮の花　成叟

甲斐

下やまよりいくもる神の森　半拙

去年の雲帰りを成る雌ね　拙介

木々は皆ひとつ咲出し後の庭　去意

恋猫の妙に来り良は秋の杖　寸松

稲妻や横田水を照して常夢　惺池

松風に我代や露消て秋の色　冰瓶

餅搗や月夜に出れば秋の暮　洲良

伊豆

河越の鳥や秋けのこと也雑木山　連水

武揖

伸る浪も日に懐かしき梅の花　甘茶

深山や新樹のこゝろ走り也　雪蕉

大数螺も蓋こそあれる垣の草　松項

武蔵

田作り由伊勢か名を知らぬ海老　源婦

鷲ふれし道入鳥の我枝子　知柴

夢や部屋の馬の河原かな　楓堂

菜の花や残りの山の雨　松雄

隣ても待るゝ時雨を待ちもせす　幻史

ほかして笹に鶉まて萩の声　百尺

松かせの小春うつるや水の上　文種

古川にみかかすかなり竹の奥　其峰

傾城の声ゝおけき時雨れ　酉山

立まよ菜の花にさひしや我か庵　芦水

香もみえに春寒しやうめの杖　春湖

かへるさの風の光る川筋　甫山

ちるとも蝶に縄ふあそひて　精知

稲妻も芸州柳の宿　青亘

出船の雪の中から朝日かな　夢笠

ちるや花に桜ふよりて四五人　湖

桜よりさきに虫扇の絵にあそひ　山
居なからも雲へて雨に行越　谷
中々に紬の縁にくらへ　豆
すゑて甲斐和来家の浅かり　笠
笹揺れてくるる何も来ぬ路ち　沢
きつね枝のみする漆蝶　山
おもしろしつまるかたに居る有　谷
獺の跡へ吹くく荻の下を　豆

深藪の二枝にまかせ出て陰　笠
かりしをくれしよりも仏性　沢
ちる頃はまつ花から残り日　山
八千代の松葉の蔭に生て鶴　谷
籠まて出門にもさつて清め湯　豆
自由にならぬ何の重ら　笠
左細よ徒の越前一の出来　沢
由なきさく喰出安嘛出まし　山

亀ノ鴨網にさわしく茂るさ　奇
夏ハとかふよりもすゝみけり　旦
風入て柏散除庭をとゝのへて　笠
まつみる影にもたちさわぐ　泓
めくらしたる花をなれは事こそあれ　山
深ふかしら娘のまねそ見かほ　奇
若草にけ生て月見るかたに浦　旦
除きのいきれし娘の姫室　笠

かしこ姥達を引さへ斯ぞ供養　泓
彼岸にも彼人共以まで　山
石まみちまさに見えるのも神に汁　奇
此深の古仏の池まり柱し　旦
湖山もめてる深の者達ぞ　笠
あらす蚊に尽れそ硯室　泓

東京

渺かるこゝしまも立て渡られ　等栽

てる鶯の声より晴て春の日　其化

東風の朝の嬉し鶯啼けども　金雅

蛙で啼ぬる降接穂かな　守山

西深く飛出て雲より出し妻の花　月虎

水よりも先へ和らぐ柳かな　花秋女

出代や草て裾摺らる桐の伸　樹佳

紅梅や雪残り咲かけて　桂女

咲けり遊ぶ人の機嫌も春心　探女

山鳩や身を縮さえて啼田螺　青笠

行かれし見つけたる心の思ひ　太年

田螺なり借りまゝし野梅かれ　素石

風よりも水行きや谷の奥　超室

いつまで咲き来はさめぬ梅の花　富水

若草のよもぎふまれも小牡丹哉　梅年

出ゝきて見てるかしは青き庵　完然

さし汐のおよる山まで蝉の声　素水

日出るに新樹は海の帆かけ哉　文禮

里川を流して涼し山の雨　几圭

おのか身の機嫌て白ふ新茶かれ　暁烏

秋るを嗅猫か兎もてよせし　詢考

一さし申につかまし扇かれ　涼袋

かゝる稲も見よ田所や雁の声　蛩乎

松茸や庭てとらぬ料理鍋　咸雅

水もたて相生の声あり蟋蟀の声　竹丈

晴よる夜の稲刈りや千本松　睦松

三ツよしの末枯つゝる隣哉　芳泉

木枯に身をよせて舟みなとし　圭石

稲のけて松さし青し丘の松　子畝

二ツ三ツ袖に露置て見し蘇のなれ　丹鳥

みしかりし稲こゝろそれ秋のくれ　永機

人の世のうきをみよとや枯尾花　こま雄

明月や無事も中々たのもしき　多年

鯵鱠や幸ひ雲の継ぎ目　可雪

送り火も屋根ふらしたる夜中かな　己大

掛乞も訪ねる庵の深きかな　鷺笠

まつ声に柳の空をかえり年のくれ　春湖

上総

雑木の道遠く青き風　一蛙

思ひ立ち朝の千鳥の浦の波　帰雲

下総

明月や雲も名残の影もなし　旭翁

さし潮や浜の人家の畑　鶴翁

見えしまゝ姑の畑萩桔梗　鶴年

さしのぼる月影のさし隣　泰丘

美濃

つき出る月や青田のうす明り　竹雅

南天の白露残し雪の中　露牛

信濃

道よりもはるか上なり蕎麦の花　凌冬

名月のこぼれ落ちかゝり茶園　月盤

露深ししるしも茶の葉茶所　楽之

布さらし日和よきやちらし哉　松濱

生れ貴けりの上や冬の月　雄山

紫舞は風まかせなり花すゝき　貫擲

上野

喰すての冬の日暮人もさらの君　乙瓢

こぼれ萩やおきし露も拾ひつゝ　楽古

蛾ときよる目やぬるき銭拾ふち　為流

下野

流されて来りしの水田かれ　柯冬

はなくして侍らぬ都や行く年　洪山

人の世や松の塵くふ野の雉　茂精

岩代

田作りや喜びにぬ衣の物　富巖

象きて置ぬ酒や梅の香汁　壮山

まよなき秋の座敷涼みけり　有隣

畑から流して通る小夜時雨　香桑

咲ようの毎日花見牡丹の花　岱烟

露深し浮きにはよし庭の中の　松柳

姉撫や葉櫻の下茸なし　自省

きりよや餅を捨てて庭の石　忍山

木がらしや睦み親しく法師の音　菜露

信中

落葉にやあれし姥が雉　潮山

新草やはかなき家の御神楽　芳洲

門出して人のまうけし雪の舟　葉舟

能登

おもふ事ぬれもせず旅の月　高朴

越中

きぬたうつ[illegible]又ぬれ雲　其諺

武佐

菊のはし麻にもしや雨の降　琴光

[illegible]旅や竹原中[illegible]　雪湖

新秋や[illegible]秋の[illegible]に都[illegible]　晴雲

露[illegible]の軒の[illegible]かれ　旭扇

[illegible]寒の入　青暁

[illegible]柳かな　木甫

佐渡

[illegible]出て都の[illegible]雛子　牧之

人[illegible]かれ　斧舟

因幡

蝶[illegible]　鳥年

伯耆
天月に来て行りの雲や冬の雁　鶴樓

出雲
みな清うきはつて野をは行き草花の井　曲川

備前
花に雲月も白も見えつゝゆかり　九十翁　こつる

安藝
稲葉や掛りて青柏に見ゆる　由池

長門
汐待ちに朝日の光り手に[illegible]　梅君

淡路
雲断て海山かけて花の春　晩臣

阿波
ぬくぬくと[illegible]も梅が香も[illegible]　周栄

石に根のたえも[illegible]　[illegible]　松清

[illegible]も[illegible]ぬくを[illegible]　無知

隠れ舞葉に湯より鶺鴒　史白

讃岐
ゆき杉高梢のちりて焼の風　告海

伊予
露も紅葉とゝと海の泉　鶯孫

土佐
御にあへて言伝も何し月に雨　五葛

秋来ぬ門の庭の葉に消　松塘

豊後
末の雨耳まで汚れ青手降　蘇小

近きに来て寒さも知るよ冬籠　乙人

暁の色てらして露ある梢見えて　甫山
花の便をきけ　咲かぬ梅　素湖
うらゝかの出船の篝を加へ秋て
京は見えて隣る雲入定寺
月に秋の旅の枕く小高く
宮うてゝもえ苅る神の笹

湖　山　湖　山

子猫の手に物陰出る一群
はなれし花嘯きて帰り耳なる
恋しさ人と物の戒裾宜ハ裾豊
ところなる花の高布施も出
初茶を籠に入る笋に茶の芽
昼の清水にも守女業立家
小流の中月を風毛流れ茶早
高山の秋の雲霧を流れし

湖　山　湖　山　湖　山　湖　山

燕の帰る中ゝめし四十雀　山
儒佛もよれしこのこえらぬなり　湖
ながみる顔合て障子のきりて　山
鶴まつくまゝ子も出さ待する　湖
何より春暖は運飛の節なり　全
米搗みなからしとゝ出来る　山
右みさとりて盛で我うた　湖
相識ゑらぬて劇くなり　山

江かんの私し夢と醒の起臥よ　湖
もう有座敷の空堀の所沽　山
催しなり降ける雪と人の上　湖
菜蕾の箕みな同居を漏　山
ありまゝとはいとねて為筆を　湖
細くけゝて花よ紅に飯　山
病脚もおもよ頼とふ夜みって　湖
天満の祭り篝火さしまき　山

水桶の箍のたかけは足取な　沾

精進の揃ひまじる生さかな　山

初むしのかまへしけて暖也　沾

茶の花ちらす嵐は川こゑ　山

浮夜てまた身すがら参て見世　沾

またしまかれて往ゆる有ねる　山

きなすぎ肩に夜ふけて銭担ぐ

けふや宰府の加賀急ぎ行

歳暮の忌をしれとしらぬ

売らきのくの経て墓遊あり

この道を帰るまたたる家

月をあふ人盃何もちからを

亀戸の背きに摂

雨風も梅もちてけんぷつ

杉芽

きく迄も梅のめてたき夜の里　家渓

花咲て出てこぬ水の濁れかな　河玉

毎待東方の人に語り花の中　通仙

眠の芽れ潮に春ふる日永かれ　公木

狩ける日永きも折年哉　玉水

華もてる比ちきりさそふて霞桜　一農

梅の雨雲に隠して梅の花　竹示

川ませて春の寂しさ折かね　五風

咲初し扨も夜の白らめ梅の花　子泉

雀子の啼矢ともなる人の親　一明

湯茶屋や今のも左の渡舟　梨雲

ててふふるさきぬ花の上より雪のこ　一知

雲ゆきも舟ゆる小舟の舟の花　紫仙

大寺に年寄るしも白ふ砚箱　八百七

箙腰にさくら折るも八重桜　雅仙

まつえてきしや竹と中し浮の梅の花　梧楽

化粧ふ女子か寿くおもふ雛の客　捉臣

たつても吹きさふの風や夜雉　江二

青梅やしら雲封る影の山　仙民

吹くしくたく放をその松舟　埜風

草履去のすて[illegible]ゐるほとけれ　指月

かゝる木る松の雨や春の禁　松山

小漏れ[illegible]雛分のさしれ[illegible]れ　豊楽

きく人[illegible]をし[illegible]花　晴心

久しさや雪も霞みも年の友　笛水

ゆくまる船のきゝ[illegible]しゝれ　未来

氣如居

梅は年とちしはしてもよ[illegible]なり　竈雨

なまけともつれ桃の花　梅嫩

桃の花さくや都き所[illegible]　三巴

うくめの[illegible]の在[illegible]夜色年　明山

平かに[illegible]通りけり　桃芽

ゑわりりも入あやめの軒　菫路女

蓮織ると聞しかり枇杷の花　士峰

萬歳の顔美しき京の春　竹年

海苔河さる碇も来るに煙なる團　蘿岐

蘇鉄のかたみをと譲りけり　五三

口鼓きゝ傳へたる猫の声　呼海

花にあく地とも咲えぬ朧月　明房



坤ヶ浮て海原遠き紀の山　一之

梢ちりて稲の露東山とて塩り　富祖

自賀

津つと生て知らぬ足まもる梅の花　甫山

種田甫山隠士は陸前国宮城の
さむらひにて故ありて住る白賀
蕃山下に泥訪去りて母にて性
清和義兼氏にて法源この字
をかんぞを為春修僧にて古誌
舜手なきも無風流をもて古に
こなりて画けるを学びて其この
務を日々好みて騎家業に来りたり

誠ふもみ多く文意通らてハいと安
こゝろもの法事に常にも親し
みたゝ諸人の保明に俳の法は絶
商業ふ何事し俳の家躍に
とゝ悔りしこゝ昨年ありとまて
文源ちも思ふ更のなきゝ序に性
俳事俳のこと筆達磨いかなに
一集を編みすらふ跋ゝ文をと

色ゝる謝に俳の理をも語るゝる
俗なる雅を雅を入繁にも常にあ
へあるも一言ゝ便りもしゝ以て発友
耳ゝとこゝの履歴を深くるの
跋とし換ふ

六十七老人書之

者陳於里前郡吉田町誤衛門宅ニ業習居於
堺自鶯蜂ト云歌名ヲ洗心亭萩山ト改
右先生明治三十九年壹月於白梅老行年七拾参
参年門業伊藤理安先生斗句存出席業ニテ
吉田町三十有余年継細沼内伯宅業依テ堺回済
ト門業ニ付之ヲ毎日参リテ
堺内ニ而危篤臨入候節
辞世

春の日ひて君と伴
身なしねむみや古格
この世を捨てさりしき

伊藤安歌名梅里園ト改
弟歌ニ此句

世をさりし君と
名おや涙こそ
言葉もかゝる
松乃下風

明治十八年乙酉晩春

鍾田氏蔵版



[illegible]安隨筆
二冊之内

聖和學園
短大
第 6632 號
受入
昭和 36. 3. 14